

虹にライチョウ飼育一歩ずつ



飼育するライチョウと秋葉さん

①81 何よりも動物が好き

丸っとした体つき。白と黒、茶色のまだら模様。ニホンライチョウがガラスの向こうからこちらの様子を興味深そうに伺う。

「T-2005ちゃん、かわいいね。いい子だね。ようやく部屋に馴染んでくれたんですよ」。富山市ファミリーパークの飼育展示に「あきば ゆき」関わる部署の係長で獣医師の秋葉由紀さん(43)が園内のライチョウ舎で説明する。

T-2005は園内で付けられたID番号だという。まるでロボット。何とも無機質に響く。愛嬌たっぷりの見た目からは遠い。

「ライチョウは環境省からの借り物。野生復帰を目指している。だから変に愛着を持ちすぎないようにしています」。それでも、秋葉さんはずんぐりむっくりした体と人間を怖がらない性格を愛おしく思っている。

秋葉さんは国特別天然記念物で絶滅危惧種であるニホンライチョウの繁殖に取り組む。日本動物園水族館協会(JAZA)のライチョウ計画管理者でもある。国内の動物園や環境省、研究者と連携し、日本の動物園全体での繁殖計画を取り仕切る。「ダブルワークしているようなもの。時間がいくらあっても足りない。でも山に行ったり、研究者の方々と会ったりする機会も多いので刺激的です」と言う。

休日も動物にどっぷりだ。趣味のジビエ料理を作る。仲の良い猟師から、イノシシやクマの肉を分けてもらい、鍋や焼き肉にする。肉だけでなく、骨まで愛する。リビングの棚にはぎっしりと動物の頭骨が並ぶ。一日の終わりには、それらを眺めながら酒を飲む。「頭って生きるために必要な大切なものがつまっている。食べることも呼吸することも全部頭からじゃないですか」。日焼けした顔でハキハキと話す。

◇

東京で生まれ育った。小さな頃から上野動物園が大好きだった。連れて行ってもらえるのは、決まって歯医者さんの帰りだった。「『終わったら動物園に行けるから頑張るなさい』って騙されていました」

小学生になると、親は付きっきりではなくなった。園内を自由に駆け回り、好きな動物をじっくり観察した。いろいろな角度から何枚も写真を撮った。動物図鑑と見比べるためだ。お気に入りには、コビトカバ。ぬるっとした皮膚が好きだった。

秋葉さんにとってはディズニーランドよりも上野動物園の方が「格上」だった。そ

の頃から、将来の夢は獣医だった。

高校生になっても夢は変わらない。当時人気絶頂だったSMA Pや小室ファミリーよりも、動物に強く惹かれた。好きだからこそ、動物園には1人で行った。デートでも誘わない。「自分と同じ熱量で動物を見る人じゃないとちょっと難しいでしょう」と笑う。受験勉強で動物園へ行く回数が減ったが、それは獣医学部に入るためだった。

◇

大学は動物園のように楽しかった。動物への思いに濃淡や方向性の違いはあっても、好きなのは同じだ。研究も性に合った。「出席日数とか、獣医師の国家試験とかを求められないなら、もう1回やり直してもいいくらい」と言う。生きている動物はもちろん好きだが、骨になっても剥製になっても命の不思議を感じられる。大学の教授の紹介で、国立科学博物館(科博)に通い



「竹林」西淳

詰め、形態学を学んだ。卒業論文はリス科の動物の骨格について書いた。

当時科博の学芸員だった東京大総合研究博物館教授の遠藤秀紀さん(59)が秋葉さんを指導した。狭くて居心地の悪い研究室で、毎日熱心に骨を眺めていた秋葉さんの姿を覚えている。「彼女には好奇心と論理性の両方がある。言葉の端々ににじんでいましたよ。楽観主義なのも研究者向き」と語る。

秋葉さんはいわゆる「街の獣医」である臨床には興味が向かなかった。人と動物が共生するための公衆衛生に関心を持ち、就職活動した。厚労省や自治体での就職を目指したが、専門職はどうしても狭き門だった。

結果として縁があったのは、旅行すらしたこともない富山にあるファミリーパーク

だった。里山全体を動物園として提示する施設だ。「今まで行ったことのある動物園とは、コンセプトが違って新鮮」と思った。

◇

獣医師の仕事は、緊張する場面の連続だった。薬の量を間違えれば動物は死ぬ。安全確認を怠れば自分の命が危うい。ヒヤとする場面は何度かあった。

休日であっても呼び出されることも珍しくない。担当するノウサギに危険な兆候があれば、旅行中でも大阪からとんぼ返りした。動物園の中では、命の重さには体の大きさも、希少種かどうか関係ない。「たかがノウサギとは絶対に思わないですね。『すぐ戻ります』と言うだけ。私に連絡しないと危険だと飼育担当者が思ったんだから、その判断を信じるだけです」

「神の鳥」として大切にされ、富山の県鳥でもあるニホンライチョウの飼育は、ファ

ミリーパークの念願だった。勤務した当初から園長の強い意向を聞いていた。秋葉さんはどちらかと言えば半信半疑だった。

ライチョウは未知の部分が多いし、教科書もない。乗鞍岳や室堂周辺にはそれなりに生息していて「まだ大丈夫」という認識があった。しかし、トキやコウノトリは野生下で一度絶滅した。生息数に余裕があるうちであれば、繁殖させられる可能性は高まる。挑戦する意義も感じていた。始まったら全力を尽くすだけだ。

2015年。ニホンライチョウの飼育がスタートした。乗鞍岳で採った卵をふ化させるところから始まった。4羽がかえり、そのうち3羽が生き残った。

いつも仕事は緊張感を持って取り組む

が、ライチョウは格別だった。飼育係が手を震わせて、人工孵卵器を操作していた。それを見て「できるなら触れたくない」と思った。薬を飲ませる時にはやはり手が震えた。

飼育は失敗の連続だった。突然餌を食べなくなったと思えば、翌日に死んでしまうこともあった。注目度が高く、1羽命を落とすだけでもメディアに大きく取り上げられる。ニュースを耳にした友人には「またダメだったの?」と言われる。一方で、「みんな注目してくれているんだ」とも思った。病気の兆候を見逃していたのではないかと、スマートフォンで毎日フンを撮影した。写真アプリを開くと、ライチョウのフンばかりが並んだ。「知らない人が見たら心配されちゃいますよね」と笑う。

現在国内の動物園8施設での飼育数は計56羽。うちファミリーパークは16羽と最多だ。成鳥になるまで母鳥がひなを育てる育雛も成功させた。昨年園内で生まれたライチョウが、栃木の動物園で繁殖している。そのひなが今年野生復帰する予定だ。人工授精や腸内細菌の移植にも取り組んでいる。研究が進む一方で、依然として野生下より人工飼育の方が死亡率は高い。「何か足りない。あるいは何かやり過ぎている。まだトライしないといけないことがたくさんある」

秋葉さんがファミリーパークでニホンライチョウの飼育に取り組んで足掛け10年になる。当時のスタッフで今も現場に残るのは秋葉さんだけになった。「ここまでどっぷりやるとは思っていなかった」

長い間ライチョウと関わる中で「ライチョウを守ることは自然と文化、歴史を守ること」が持論になった。ライチョウは高山帯の自然と山岳信仰の象徴だ。ライチョウという一つの種の存在への関心が高まれば、温暖化で変わりつつある山頂の自然を守ることにつながるかもしれない。

今も病気になったライチョウに触れるのは怖い。でも、以前よりは手が震えない。ただ助けようと、アドレナリンが出る。

富山市ファミリーパークは1984年に開園し、今年40周年を迎えました。秋葉さんは「私なんて普通。面白いスタッフはたくさんいますよ」と話します。ゴールデンウィーク中も多くの人でにぎわっています。もちろん、ガラス越しに眺められるライチョウも人気です。秋葉さんや、たくさんスタッフの努力の成果です。



「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141~160回目までの20話分を取っています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は6月1日(土)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局